

# 明言 深問

ずばり答える

本音を探る

県の「離島活性化専門家派遣事業」の本年度事業で、特産品開発や地域ツーリズムに取り組んだ9町村(11島)の即売・発表会。ふち離島フェア(島から来たさあ)が28、29の両日、ゆいレール県庁駅構内で開かれる。離島活性化に向けた本格的なソフト事業として注目されてきたが、本年度が最終年度。2年間、民間の地域支援コンサルタントの立場から直接、現場で支援に当たったカルティベイトの開梨香社長に、事業の意義や成果、課題などを聞いた。

(聞き手)政経部・上岡正敦

―事業の意義は。

「地域活性化のために島の人が何をやりたいのか。

## カルティベイト社長

### 開 梨香氏



## 地域活性化意識の共有から

これが明確でなければどんな事業であつてもうまくいかない。また、行政がどんなに旗を振つても地域の人が

「官民のほかに住民間、あるいは離島間の情報交換が活発になつた。栗国島では

「単に議論で終わらず、

「今後の課題は。」「それぞれ次のステップ

「特産品開発や地域ツーリズムの取り組みを喜びに、楽しみに感じる事が事業継続のエネルギーになる。北大東の月桃マップは、肌の弱い人に人気で、西表島の工房の指導で製品化した。本部町水納島の黒豆ジャムも、プロの料理家の指導による共同開発。みんな一生懸命、アイデアを出した商品で工夫がある。楽しみにしてほしいし、ぜひ島の取り組みを応援してほしい」

が経済活動をしなければ活性化はできない。その意味で、官民の立場を越えて話し合う場を作り、問題意識を共有できた意義は大きかった」

「島々の取り組みがどう変わったか。

「事業年度内に目標をつくり、小さな成功体験を重ねることを重視した。伊平屋島では特産品への反応を知るため、会議後2週間しかか

旧正月に島外のツーリズム客の受け入れを試行したが、会議では、民宿経営者が初めて一堂に集まった。伝統行事も資源として掘り起こせた。意識の共有による信頼関係づくりにもつながった」

ひらき・りか(本名・比嘉梨香)1959年生まれ、石垣市出身。琉球大学卒業後、県内放送局のアシスタントディレクター、インテリア関連会社代表を経て2000年に有限会社「開」(現カルティベイト)を設立。地域振興の支援事業を手掛けるほか、NPO法人日本エコツーリズム協会理事として幅広く活躍する。07年4月から県教育委員。